

第13回 通訳案内士制度のあり方に関する検討会の開催結果について（概要）

平成28年3月24日
観光庁観光資源課

我が国に通訳案内士制度が創設されて60年以上が経過している中、訪日外国人旅行者数の増加及びニーズの多様化に的確に対応できるよう、中長期的な視野から、新たな通訳案内士制度を構築するための具体的な方策について検討を行うため、「第13回 通訳案内士制度のあり方に関する検討会」を開催しました。

1. 開催日時・場所

- ・ 日時：平成28年3月24日（木）14:30～16:30
- ・ 場所：経済産業省別館8階850会議室



2. 出席者（別紙のとおり）



3. 配布資料

- ・ 委員名簿
- ・ 配席図
- ・ 【資料1】業務独占のあり方について
- ・ 【資料2】前回の検討会における各委員の意見
- ・ 【資料3】議論に当たっての参照資料

4. 検討会での発言等

事務局より、資料1から資料3の説明を行い、議論を行った。
以下はそのうち主なものの要約。

- 今、本当に増えているのは個人旅行者なので、本日示された、例えばA、B、C、Dぐらいの段階に分けて、旅行会社が依頼する観光ツアーには必ず上位レベルの人が従事しなくてはならないこととし、個人の観光客への対応には、下のレベルの人でもいいというような柔軟な改善策については、疑問がある。
- お客様から対価をもらっている以上、旅行会社としては、質の確保及びその質の確保ができる上での質の指標の明確化については非常にこだわりたいと考える。
- 通訳案内士という名称を独占するとしても、これが外国の方にはその言語での名前になる。英語だとツアーガイドとなってしまう、誰でもツアーガイドですと言えることになってしまうことを考えると、名称独占というのが機能するのは我が国の中だけになってしまう。

- 例えば英検の1級、2級、3級では、1級の方は少ないけれども3級の方は一般的に普及してたくさんの方が試験を通るようになっている。それに似たような効果を狙って、例えば、通訳案内士Aクラス、Bクラス、Cクラスと表記してお客様が自由に選べるようにしたら、品質保証の1つの支えになるのではないかと。
- 対象業務の明確化のところが一番大きいと考えており、「日本の伝統、歴史、文化等を体現する施設において、その解説等を行うこと」がポイントになる。資格がなくてもできる部分がある程度明確にすれば、外国語が必要な通訳案内士としての仕事、あるいはそれ以外の仕事という部分が明確になってくるのではないかと。品質の確保については旅行会社としても非常に重要と考えており、この日本の伝統、歴史、文化等々について説明していただくということがお客様の満足につながると思う。
- バス業界ではセーフティバス制度が、旅行業界も品質認証制度というものがあり、営業はできるがさらに厳選するという制度がある。通訳案内士についても、今、通訳案内士の資格を持っている方、非常にレベルの高い方たちを頂点にして、もっと裾野を広げていく必要があるのではないかと。
- 通訳案内士の数について、英語圏は足りていると思うがアジア各国の言語に対応できる通訳案内士は不足しているのではないかと。外国語を母国語とする人々によって通訳案内士の資格取得に向けた制度をつくるということが必要になってくるのではないかと。
- 訪日外国人が予想以上の勢いで増えていることで新たな課題が生まれており、旅行、観光をどうやっていかに稼ぐ産業にしていくかということが1つの大きな課題になっている。
重要なのは、さまざまな個人旅行が増えるにしろ何にしろ、ニーズに対してしっかりとサービスを提供していくことができるのか、そこでしっかりと稼げるような仕組みづくりができるのかということであり、そして旅行そのものの質も担保していかなければいけないということである。
- 現状、これまでの日本の旅行に関する制度が国内旅行を重要視した法制度になっているように感じており、訪日外国人旅行者に対する制度体制になっていないのではないかと。
民泊の問題、OTAの問題、ツアーオペレーターの問題、いずれも日本の事業者と海外の事業者の競争環境がイコールフィッティングになっていないという問題が一方である。グローバル化になっていくので、競争条件とか、制度の統一化というものをしっかりと担保しつつ、事業を育成するような制度づくりを進めていただきたい。
- 今、中国のスルーガイドが問題になっているが、そういったものを防止するには、一定の業務独占的なものがないと品質保証にはならないのではないかと。今のまま

だと怪しい人は必然的に増えてくるのではないかという懸念を持っている。

○プロの仕事には資格が必要なんだということの共感をいただきたいということと、プロとして、資格として、業として、なりわいを重ねようとする場合には、何としても品質が問われることとなる。